九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ローザ・ルクセンブルク研究の一視角 ： 「プロレタリアート」派のポーランド論と若きローザ

岡村，東洋光

https://doi.org/10.15017/3000009

出版情報：経済論究. 34, pp.1-26, 1975-07-15. 九州大学大学院経済学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

ローザ・ルクセンブルク研究の一視角

——「プロレタリアート」派のポーランド論と若きローザ[1)]——

岡　村　東洋光

1. はじめに

若きローザのポーランド論を簡単に要約すれば，次のようにいえるであろう。すなわち，ポーランドにおいては資本主義が確固たる発展をとげ，その過程でロシアとポーランド（ロシア領）の経済的一体化をもたらした。その結果，ポーランドの政治的独立のための客観的，主体的条件がなくなっており，ポーランド社会主義者にとっての当面の課題は，ポーランドの独立運動ではなく，むしろロシアのプロレタリアートとの革命的連帯による，ツァーリズムの打倒にある，というものである[2)]。このようなローザのポーランド論の基底には，たとえば国境や民族を越えて発展するという側面を強調する資本主義観があり，それはまた晩年のローザにも引継がれているものである。このことはすでに最近のローザ研究において指摘されていることであり[3)]，そうであるがゆえに，ローザの全体像を明らかにする際に，その出発点として若きローザのポーランド論をとりあげる意義もあるといえるであろう。

ところで，ローザのポーランド論は，PPS（ポーランド社会党）＝マルクス・エンゲルスのポーランド（独立）論の批判[4)]であるとともに，80年代の「プロレタリアート」派のポーランド（革命）論の批判を通して形成されたものである[5)]。ローザの言葉によると，「社会愛国主義」批判と「ブランキズム」批判である。だが，これまでの研究においては，どちらかといえば，前者の問題に重点がおかれ，後者の問題についてはあまり注目されてこなかったのではないかと思う。そこでわたくしは，本稿において1880年代のポーランド社会主義

形成期における，ヴァルィンスキを中心とする「プロレタリアート」派のポーランド論について若干の検討をくわえ，その思想的特徴をローザのポーランド論との関連性を意識しつつ，整理してみたいと思う。

80年代における「プロレタリアート」派のポーランド（革命）論は，90年代における革命運動の中から生まれた「ポーランド人民による，ポーランド人民のためのポーランド革命論」[6] なのであって，そこに示されている諸論点は，ローザのポーランド論の中に生かされているものも少なくないのである。それは，ローザのポーランド論と比べれば，いまだ多くの点で萌芽的であったり，単なる事実の指摘にとどまっているという限界をもってはいるが，ポーランドにおける国際主義的社会主義思想の基礎をうちかためたものとして，ローザによるポーランドへのマルクス主義の導入の際に，大きな影響を与えたのではないかと思う。

そうしたことをふまえて，以下の叙述を次のような順序で進めていきたい。まず，ヴァルィンスキらの「プロレタリアート」派を中心として，ポーランド社会主義草創期の活動と成果について簡単に紹介し，しかるのちにその中から形成されたポーランド論の特徴を，現状認識，民族問題，革命論について整理し，最後に，それらの論点と若きローザのポーランド論の関連性について探ってみたい。こうした作業によってわたくしは，ローザの思想的全体像におけるポーランド的側面の一端を解明する糸口を見つけたいと思うのである。

註

1）ここでいう「プロレタリアート」派は次のような意味を含んでいる。ヴァルィンスキを中心とするポーランド社会主義者は，1882年秋に，「プロレタリアート」党を創立したが，そこにいたる前史として「抵抗基金団」やそのメンバーのジュネーブへの亡命など，一連の活動があった。わたくしは，この前史を含む「プロレタリアート」党の意味で，「プロレタリアート」派という用語を使うことにしたい。もうひとつの限定は，本稿で扱っているのは，「第Ⅰプロレタリアート」（85年頃まで）であって，これが崩壊したのちに，その伝統を受け継ぐことをめざした「第Ⅱ」「第Ⅲ」のプロレタリアートについては，対象からはずしてある。同時代には「ポーランド人民」なる愛国主義的傾向を持

った組織があったが，これについても本稿の問題意識に従って言及を避けている。

次に若きローザとは，時期的には彼女が『ポーランドの産業的発展』を仕上げるまでをさしている。この時期に彼女はスイスにいたが，問題関心としては「ポーランド」にあり，そうした意味ではポーランドのローザでもある。またこの時期に，彼女はマルクス主義をわがものにしたのであった。

2）たとえば，「ポーランドにおける社会愛国主義」(1895/6)の中でローザは次のように書いている。「ポーランドとロシアは一つの資本主義的機構になったのであるから，ポーランド・プロレタリアートとロシア・プロレタリアートは一つの労働者階級になり，当面の共通の課題は——ツァーリズムの打倒——である。」Rosa Luxemburg, Der Sozialpatriotismus in Polen. (Die Neue Zeit, 14 Jg. 1895/96, Zweiter Band, ss. 459～470) in: Rosa Luxemburg, Gesammelte Werke. Band 1. 1893 bis 1905. Erster Halbband. Dietz Verlag, Berlin. 1970. SS. 37～51（以下. G.W. と略). 丸山敬一訳『マルクス主義と民族問題』（1974）に所収。引用箇所は126頁。

3）次の三者は問題意識を異にしつつも同じような指摘をしている。竹本信弘「ポーランド社会主義運動とその思想」（『経済論叢』第98巻第1号）では「かの女のマルクス主義の思想的個性，ないしは，その真髄となるところのものは，すでにポーランドにおけるローザのうちに宿っていたと考えられる」（47～9頁）とされている。また，肥前栄一「ローザ・ルクセンブルクの資本主義観の二，三の特質について」（『ドイツ経済政策史序説』1973, に所収）は「ローザ・ルクセンブルクに特徴的な資本主義観は，いちはやく，彼女のポーランドにおける活動時代に与えられ，しかもその後の生涯の最晩年にいたるまで基本的に変ることがなかった」（357頁）とされている。さらに，松岡利道「ローザ・ルクセンブルクの帝国主義論」（『経済学論集』第13巻第4号）では「ローザの資本主義観は彼女の最初の本格的な経済研究である『ポーランドの産業的発展』（1898）の中にみられる」（38頁）とされている。

ほかに，西川正雄「ローザ・ルクセンブルク——史料と文献——」（『思想』1971, 1）及び伊藤成彦「新しい社会主義像への模索」（『思想』1973, 12）も参照。

4）竹本氏の前掲論文，及び肥前栄一「ポーランド・ナショナリズム論争ノート」（ローザ著，肥前訳『ポーランドの産業的発展』の解説）は，いずれもこうした側面に焦点を合わせて書かれている。

5）ローザは，「ポーランドにおける社会主義」（1897）で，ロシア領ポーランドにおける社会主義思想の三形態として，ブランキズム，社会民主主義，社会愛国主義をあげて，社会民主主義の立場から他の二つを批判している。Rosa

Luxemburg, Der Sozialismus in Polen. (Sozialtisische Monatshefte, 1. Jg. 1897. Nr. 10, S. 547～556). in: G. W. Bd1, Erster Halb. SS. 82～93, 丸山敬一訳，前掲書に所収。

6）竹本信弘，前掲論文，58頁。

2. ポーランド社会主義運動と「プロレタリアート」派

ポーランドにおいて社会主義運動が始まるのは，1870年代のことである。当時のポーランドは，18世紀末以来のプロイセン，オーストリ，ロシアの三帝国による分割，支配の下におかれていた。これら三領域では，貴族を中心とする一連の，民族独立のための蜂起があったのであるが，いずれも敗北に終っていた。1863年の蜂起（の敗北）は，そうした運動の終りを告げるものとなり，これによって貴族階級は歴史的に破産し，以後ポーランドは急速に資本主義発展をとげ，同時に社会主義運動の基盤をもつくりだしたのであった[1]。しかし，近代の独立国家をもたぬことが，ポーランド社会主義運動とその思想に一つの個性を与えることになった。

これら三領域のうちでは，ロシア領ポーランドにおける社会主義が最も独自な運動と思想を形成した。それゆえ，ここではロシア領ポーランドにおける社会主義運動を，ヴァルィンスキらの「プロレタリアート」派を中心に，その活動と成果について簡単にみておくことにしよう[2]。

ポーランドに社会主義思想を持込んだのは，主としてロシアやドイツへの留学生，及びドイツからの移住者であった。なかでも「人民の中へ」の運動の最盛期であった'70年代のロシアへの留学生たちは，この運動によって大きな影響を受け，ペテルブルクで「グミニィ」〔Gminy〕[3] なる組織をつくり（1874年），種々な非合法文書を読んだ。彼らはやがて，ポーランドで革命運動を開始すべく，数人をワルシャワへ送り込んだ（1876年）。その中でかなりの成功をおさめたのがヴァルィンスキ，L. Waryński (1856～1889) であった。彼は，ワルシャワを中心に，社会主義の宣伝と労働者階級の生活，労働条件の改善を意図する「抵抗基金団」〔Resistance Funds〕[4] を組織した。一種の準労働組合的なこの組織は，最盛時には数百人を数えたといわれる。むろん，こうした活動

は非合法であって，ロシア当局はすぐに弾圧にのりだし，主要メンバーの二度にわたる逮捕と，亡命によってたちまち運動は瓦解してしまった。ヴァルィンスキは，他のメンバーとともに国外へ逃れ（1878年），ガリシアを経て，やがてジュネーブへ向うことになった。

この「抵抗基金団」の思想は，「ブリュツセル綱領」[5]（1878，9）において示されている。その内容は，全体としてはバクーニンの思想的影響がみられるのであるが，それとは別に注目すべき発想がみられる。それは，同時代のロシア・ナロードニキが農村共同体を社会主義的再生の拠点とみなす，農民社会主義である[6]のに対して，「ブリュツセル綱領」はそうではなく，むしろ労働者階級を革命の主体とみなす，労働者社会主義であることである。こうした発想は，「プロレタリアート」党ではさらに明確化され，ポーランドにおいては労働者階級のみが革命的階級とされて，ポーランドの国際主義的社会主義思想の基底的発想となった。

さて，当時のロシアやポーランドからの亡命者の集合地であったスイスのジュネーブにやってきたヴァルィンスキは，メンデルソン S. Mendelson（1857～1913）らと集まって，ポーランドの社会主義運動を進めるために，定期雑誌「ルヴノシチ」〔Równość〕[7]を，そしてのちには「プシェジヴィト」〔Przedświt〕[8]を編集，発行した。この亡命時代にヴァルィンスキらは，ロシアの亡命革命家や西欧の社会主義者らと交流したが，特にプレハーノフに代表される「黒土再分割」派とは親しく，一時期共同生活をしたこともあった[9]。こうした交流を通してヴァルィンスキらは，一つの転換をしている。すなわち，思想的にはバクーニン的な社会主義から，資本主義批判の武器としてのマルクスやプルードンらの思想を受容し，西欧的な，「科学的」な社会主義へと転換した[10]。また政治的立場として，彼らはポーランドの独立運動に反対し，当面の第一義的な課題をロシアにおける政治的自由獲得の緊急性とする立場を確定した[11]。こうした立場の獲得は，ヴァルィンスキらがポーランドにおける革命運動を，ロシア帝国全土におけるツァーリズム打倒の斗いの一環として有機的に位置づけたことを意味する。こうした思想は，「ワルシャワ蜂起記念集会」[12]

(1880, 1) や「ロシア社会主義同志への呼びかけ」[13] (1881, 11) において表わされた。このようにヴァルィンスキは，のちの「プロレタリアート」党の社会主義思想と政治的立場を，この時期に確立したのであった。

こうした転換ののち，ヴァルィンスキは再びワルシャワへ帰還した (1881年末)。この頃には，すでにかつての「抵抗基金団」のメンバーの多くが釈放されており，彼らはプヘヴィチ，K. Puchewicz (1858～1884) を中心にして，いくつかのグループをなしていた。ヴァルィンスキは，彼らとともに「労働委員会」[14] 〔Arbeitskomitee〕をつくり，労働争議などに介入し，労働者階級の労働及び生活条件の改善をはかり，また労働者の下での階級意識の成長を促すために活動した。やがて，「労働委員会」がかなりの組織的な拡がりを見せた頃 (1882年春) に，ワルシャワとウィーン間の鉄道工事現場で紛争が生じ，それがやがて約2,000人の加わるストライキへと発展した。これを契機として，こうした斗争を指導する組織＝党の必要性を感じたヴァルィンスキらは，党綱領を作成した[15]。これは82年8月末に，「≪労働委員会≫の綱領」[16] として配布され，「プロレタリアート」党の結成が宣言された。

この「≪労働委員会≫の綱領」の特徴は，経済，政治，道徳（＝社会）の三分野において，「プロレタリアート」党が推進すべき内容を提示しているが，その際に最重点を経済斗争におき，日常的な改良斗争を基調とした。いわゆる経済主義的なものであって，最小限綱領的性格をもっていた[17]。

こうしてジュネーブ亡命時代の政治的立場に加えて，日常的経済斗争の方針が確立されたのであるが，さらにいくつかの具体的な方針を決定するために，ポーランド社会主義者はヴィルナに集まった(1883, 1)[18]。このヴィルナ会議では三つの問題が討議された。まず，状況がいまだ宣伝の時か，それともすでに扇動の時か，という問題であったが，会議は労働者の教育（宣伝）と革命運動（扇動）を同時的に結びつけて展開することとした。次に，政治活動の方法に関して，会議は反政府テロル活動を承認し，ロシアの「人民の意志」党がそれを実行する唯一の組織であると認めた。三つめは，党の活動領域との関連で，どんな党をつくるべきかという問題であったが，会議は全ポーランド党やポー

ランド・リトアニア・白ロシア党などの案を否定し，共同の綱領と共同の中央集権的政治指導部を持つ，単一の全ロシア党を結成し，そのポーランド支部として「プロレタリアート」党中央委員会を位置づけるべきとした。会議は中央委員を選んで終った[19]。

こうして党の活動方向は，ツァーリズム打倒の斗争を進めている「人民の意志」派のテロル活動を高く評価し，こうしたテロル活動を含む政治斗争と日常的改良斗争の双方を展開するものとした。この方針に従って，ヴァルィンスキは，83年2月から4月にかけてウッジやジラルドゥで紡績工場の争議[20]などに介入し活動したが，その過程で「プロレタリアート」党内部の分派をもたらした。ポーランド労働者階級の未成熟を感じていた部分は，経済斗争と政治斗争の双方を同時的に展開する力量が党にはないのであって，当面はもっぱら経済斗争を進めるべきである，と批判した。彼らは党を離れ，プヘヴィチを中心に「連帯」派[21]〔Solidarność〕を形成した。

こうした批判や分裂はあったが，82年秋から83年秋までの約1年間は，「プロレタリアート」党の拡張期であって，その最盛時には，約1,500〜2,000人を組織したといわれる[22]。しかし，「プロレタリアート」新聞[23]の発行によって，党がひとたび公然と登場するやいなや，たちまち厳しい弾圧を受けて崩壊の危機にさらされた。83年秋にヴァルィンスキらが，そして84年はじめにドゥレンバ，H. Duleba らが逮捕されると，もはやワルシャワには「労働者サークル」は存在しなかった。

こうした結果，「プロレタリアート」党は大衆運動の基盤を喪ない，急速にテロル活動中心の政治活動へ傾むことになった。ヴァルィンスキのあとに，党の指導者となったクニツキ，S. Kunicki (1861〜1886) は，「人民の意志」派との正式な協定を結び，共同斗争を具体化することを急いだ。そのためにクニツキらが起草したのが「社会革命党プロレタリアートの綱領と組織活動に関する一般方針」[24] (1884, 2) である。この提案に対して，「人民の意志」党執行委員会は短い「返答」[25](1884, 3) で応じ，両党は正式な「協定」[26](1884, 3) を結んだ。こうして両党は，「人民の意志」党執行委員会の主導の下に，「経済

的テロル，およびそれと不可分に結びついた種々な形態での政治的テロル」[27]を使って，ツァーリズム打倒の斗いを進めることとなった。しかし，現実には「人民の意志」派は，83年1月のアレクサンドル二世暗殺の成功ののち急速に下降線をたどりつつあった。ロシア本国には，すでに主たる活動家もなく，協定もパリにいたチホミーロフとの交渉によったのである。「プロレタリアート」党はこのようなすでに崩壊に瀕した「人民の意志」派の過大評価に陥っていた。そしてクニツキが組織しえたのは，八人からなる「戦斗団」にすぎず，それもスパイが入っていたために，何ら効果的な斗いを組織しえず，84年夏にクニツキの逮捕で瓦解した。これ以後は，救援組織が残っていただけであって，この部分も85年秋に逮捕されると，もはや彼らを支援する組織はなかった。

以上，ヴァルィンスキを中心にして，「プロレタリアート」派の活動を概観したのであるが，それは数年間の短いものであり，大した成果をあげえず，ツァーリズムの反動の嵐の前に壊れ去った。だがそれは，ポーランドを舞台として，西欧的な社会主義思想をもって，ロシアの革命勢力との国際的な連帯でツァーリズムを打倒しようとした最初の試みであり，ポーランド革命運動の中に，90年代においてもその影響をとどめた。また，彼らの政治的立場やポーランド論は，90年代におけるローザのポーランド論との比較検討という視角からみると，いくつかの重要な論点をもっている。これらの点について，節を改めてもう少し詳しくみてみよう。

註

1）ポーランド分割及び民族蜂起に関しては，梅田良忠編『東欧史』9. ポーランド（昭和39年）を参照。また1863年蜂起に関しては，阪東宏『ポーランド革命史研究』（1968）に詳しい。蜂起は失敗したが，ツァーリは農奴解放を余儀なくされた。「それは旧来のポーランド社会における保守的士族の優位を震憾させ，ポーランド社会の資本主義的発達に広い門を開き，ポーランド農民史に一大画期をもたらした。」（同書，217頁）。

2）「プロレタリアート」に関しては，主に次のものを参照した。Lucjan Blit, The Origins of Polish Socialism. The History and Ideas of the First Polish Socialist Party 1878～1886. Cambridge Univ. Press. 1971.; Ulrich Haustein, Sozialismus und Nationale Frage in Polen. Die Entwicklung

der sozialistischen Bewegung in Kongreβpolen von 1875 bis 1900 unter besonderer Berücksichtigung der Polnischen Sozialistischen Partei (PPS). Böhlau Verlag Köln=Wien. 1969.; Georg W. Strobel, Die Herausbildung des polnischen internatronalistischen Sozialismus. (in: G. W. Strobel hrsg., Quellen zur Geschichte des Kommunismus in Polen 1878～1918. Verlag Wissenschaft und Politik. Köln. 1968.)

3) Gminy は共同体またはコミューンという意味。彼らはバクーニン，クロポトキン，チェルヌィシェフスキ，ピーサレフ，ラヴロフら，ナロードニキの著作を読んだ。U. Haustein, a.a.O., S. 14.

4) 「抵抗基金団」のメンバー数については，はっきりした数はわからない。ヂェヴァノフスキは300～400人，ハウシュタインは150～200人，ブリットは300人としている。M.K. Dziewanowski, The Communist Party of Poland. An Outline of History. Harvard Univ. Press. Cambridge, Massachusetts. 1959. P. 12.; U. Haustein, a.a.O., S. 16.; L. Blit, op. cit., p.26.

5) ポーランド社会主義者の最初の綱領は，官憲の眼をごまかすためにブリュッセルで作られたものとされた。実際には，ワルシャワでヴァルィンスキらによって起草され，ジュネーブへ送られ，メンデルソンらによって討議，修正されたのち印刷された。参照。Programm der polnischen Sozialisten (≫Brüsseler Programm≪) in: G.W. Strobel (hrsg.), Quellen……SS. 156～157 作成の経過については同書12ページ。

6) ナロードニキ義に関しては，さしあたり次のものを参照。和田春樹「土地と自由」主義の革命理論」（『歴史学研究』1960.5）及び松岡保「ナロードニキ主義」（江口朴郎編『ロシア革命の研究』昭和43年)。田中真晴『ロシア経済思想史の研究』（昭和42年).

7) 「ルヴノシチ」第1号（1879. 10）に，ブリュッセル綱領が掲せられた。このグループの規約によると，その目標はポーランド三領域共通の綱領に基づく社会革命組織の構築にあった。Statut der ≫Vereinigung der polnischen Sozialisten>Równość<≪(1880. 9) in: G.W. Strobel (hrsg.), Quellen……S. 157 を参照。

8) 「プシェジヴィト」は，81～2及び82～4年の2期にわたって発行された。これは，「ルヴノシチ」グループが国際派と民族派に分かれ，前者のグループが編集したものである。他方，リマノフスキら民族派は，ポーランドの独立を第一義とする「ポーランド人民」〔Lud Polski〕を創立した（1882年)。これ以降，ポーランド社会主義陣営は二つに分かれることになる。参照，M.K. Dziewanowski, op. cit., p.15.

9) ブリットは，ヴァルィンスキが再びワルシャワへ帰還する際に，プレハーノフらがその資金工作をしたと書いている。L. Blit., op. cit., pp. 46～47.

10) プルードンの思想に関しては，さしあたり，坂本慶一『マルクス主義とユートピア』(1970) を参照。

11) こうした考え方は，当時のプレハーノフと共通するものであったといえよう。参照。田中真晴『ロシア経済思想史の研究』(昭和42年)。ことに第2章「1. プレハーノフのマルクス主義への歩み」。

12) 詳しくは，「1830年ワルシャワ蜂起50周年記念集会 (1880年11月29日，ジュネーブ)」である。この集会の議長はベッカー，書記はヴェラ・ザスーリッチらであった。

13) Aufruf der ≫Równość≪ und des ≫Przedświt≪ :≫ An die Genossen russischen Sozialisten≪. in: G. W. Strobel (hrsg.), Quellen……S. 158～161.

14) 「労働委員会」には労働者，職人，学生，知識人ら種々な階層の出身者が集まった。この中には，マルクス『資本論』のポーランド語訳者の一人，クルシンスキ，S. Krusiński (1857～1886) もいた。第1巻初訳は，84年にライプチッヒで出された。参照。U. Haustein, a. a. O., SS. 76～78.

15) 綱領はヴァルィンスキ，クニツキ，プヘヴィチの3人によってつくられたが，前二者の政治主義的傾向と後者の経済主義的傾向の対立があった。参照，G. W. Strobel, Die Partei Rosa Luxemburgs, Lenin und die SPD. Der Polnisch "europäische" Internationalismis in der russischen Sozialdemokratie Franz Steiner Verlag GmbH. Wiesbaden, 1974. SS. 32～33.

16) Programm des ≫Arbeitskomitees:≪, ≫Aufruf des Arbeitskomitees der Sozialrevolutionären Partei> Proletariat <≪. in: G. W. Strobel (hrsg.), Quellen. ……SS. 162～166.

17) U. Haustein, a. a. O., S. 36.

18) これはペテルブルクの「グミニィ」の呼びかけで催された。参加者はワルシャワ (4人)，ペテルブルク (2人)，モスクワ，ヴィルナ (各1人) であった。参照. L. Blit, op. cit., p. 75.

19) この結果，党の組織構造は，中央委員会——労働委員会——労働者サークルの3構成となった。「プロレタリアート」党の組織規約については，Organisationsstatut der Sozialrevolutionären Partei≫Proletariat≪(1884). in: G. W. Strobel (hrsg.), Quellen……. SS. 169～170.

20) Paul Frölich, Rosa Luxemburg. Gedanke und Tat. Europäische Verlagsanstalt. 1967. S. 32.　伊藤成彦訳『ローザ・ルクセンブルク』38頁を参照せよ。

21) 連帯派の綱領については次のものを参照。Programm der Arbeiterpartei≫Solidarność≪, in: G. W. Strobel (hrsg.), Quellen……S. 168. もっぱら経済斗争に集中したこのグループも，83年末までには主要メンバーの逮捕で崩壊した。この時代のロシアでは，そうした類の活動すら認められなかったのである。しかし，このグループはのちに「ポーランド労働者同盟」(1889) の基礎になった。

22) 党の組織は，ワルシャワとウッジにあり，学生支部としてキエフ，モスクワ，ペテルブルク，オデッサ，外国支部としてジュネーブ，パリ，ライプチヒにあった。L. Blit, op. cit., p. 83.

23) 「プロレタリアート」新聞は，「人民の意志」派の物的，人的支援の下で作られた党印刷所で発行された。第5号まで出されたが，6号は草稿段階で没収された。第1号 (83. 9. 15). 第2号 (83. 10. 1) 第3号 (83. 10. 20) 第4号(83. 11. 20) 第5号 (84. 5. 1)。新聞に掲げられたスローガンは，「自由，工場，土地」と「全世界の労働者よ団結せよ！」であった。内容は政治論文，ワルシャワその他の工場労働者の状態，組織上の問題などであった。詳しくは，L. Blit, op. cit., pp. 89～91 及び U. Haustein, a. a. O., SS. 41～42 を参照。また原文の一部は，次のものに収録されている。Alina Molska, Pierwsze pokolenie marksistów polskich. Tom 2. 1878～1886. Ksiażka i Wiedza. 1962.

24) Allgemeine Richtlinien für das Programm und die Tätigkeit des Zentralkomitees der Sozialrevolutionären Partei≫Proletariat≪(Aufruf an das Exekutivkomitee der Partei≫Narodnaja Vol'ja≪) in: G. W. Strobel (hrsg), Quellen……. SS. 171～173.

25) Antwort des Exekutivkomitees der Partei≫Narodnaja Vol'ja≪. in: G. W. Strobel (hrsg.), Quellen……. S. 174. 執行委員会の答えは次の二論点からなっている。①諸民族の独立と自由な発展を認める立場からすれば，ロシアとポーランドの社会関係が異なっているので，双方の党が全く同じ手段をとることは好ましくない。それゆえ，「人民の意志」と「プロレタリアート」の完全な合体には反対である。②しかし，共同の敵であるツァーリズムの打倒に関しては，双方は何ら相違をもたないのだから，正式な協定を結んで斗うべきである。

26) Vertrag über Zusammenarbeit zwischen≫ Proletariat ≪und≫ Narodnaja Vol'ja ≪. in: G. W. Strobel (hrsg.), Quellen……. SS. 175～177.

27) G. W. Strobel (hrsg.), Quellen……. S. 172.

3. 「プロレタリアート」派のポーランド論[1)]

(1) ポーランド社会の現状認識

前節でみたように，「プロレタリアート」派の思想は労働者社会主義を基調としており，それはポーランドにおける資本主義発展の事実に拠っていた。「わが国は，ヨーロッパ社会の一般的発展において『何らの例外』をなしていない。搾取と抑圧に基づく現在の支配体制は，過去のそれと同じく労働者に対して，ただ窮乏と屈辱をもたらすのみである。われわれの社会は，今日ではブルジョア的資本家的体制のあらゆる指標を提示しているのであって，政治的自由の欠除がその上になお，やせ衰えた虚弱な外貌を加えているのである。」[2)] こうして「金と快楽の充足——これがわが所有階級の，今日の生活における唯一の目標であり，貧困，抑圧，無知——これがポーランド労働者の生活の内容である。」[3)] そして，反動的貴族と反ラディカルな「特権階級は，わが国の三領域において現状を是認しており，1863年以来彼らの経済的利害のために，≪ポーランドの独立≫のための斗争を全く放棄している」[4)] のであって，「現在力を増しつつあるブルジョアジーは，東方〔ロシア〕において開かれた市場に満足している。」[5)] ここにみられるように彼らは，ポーランドにおいて資本主義が1863年以来確固として発展し，それはポーランドの民族的自立化ではなく，東方〔ロシア〕市場との結合という方向で展開していると把握している。ここには，「資本主義がいまだロシアには定着していないという現状認識をもち，まさしくそこに社会主義への捷径を見た」[6)] ロシアの「人民の意志」派とは異なる観点がみられる。しかしながら，どのような産業がどの程度発展しているのか，またそれが全社会構成の中で，どれほどの比重を持っているのか，といった具体的かつ包括的な分析はみられない。

こうして資本主義の発展をみた彼らは，その本質を次のような内容において把え，批判している。「今日の社会における貧困と圧制の原因は，この社会の種々な階級の間での財産の分配にかかわる不正と不平等に求められる。財産は労働の産物であるにもかかわらず，その生産のために働いた人々に所属しな

い。今日の社会秩序においては特権階級（所有階級）が，生産活動に加わらないにもかかわらず，労働の産物である財産の大部分に対する権利を持っている。それに反し，労働者階級（非特権的，無所有階級）は，彼らの労働の産物を奪われ，貧困と屈辱に耐えねばならないのである。こうした双方の階級相互の関係は，労働者階級の搾取に基づいている。」[7] そして，こうした搾取関係は古代から姿を変えて続いており，今日では社会のブルジョア的資本家的段階に対応したものである。「中世的な服従や組合の束縛から解放された労働者は，ただ外観上自由になったにすぎない。というのは，実際には彼らと所有階級との関係は，何ら基本的な変化をみせなかったのだから。」[8] 自由な労働者とは，資本家の指揮の下で自由に働くことを意味した。彼らは自らとその家族のために，自由に働かねばならないのである。「搾取はその姿を変えたが，それは現代社会の階級関係の原則的基準にとどまっている。——所有階級と所有から駆逐された階級の間で。プロレタリアートと資本家の間で。」[9] そしてこの搾取は，窮極的なところ土地と労働用具の私的所有に基づいているのである。

彼らはこのように資本主義の本質を捉え，批判しているのであるが，その論理にはマルクスやプルードンの思想的影響をみてとれるであろう[10]。

(2)　ポーランド民族問題

民族問題についての「プロレタリアート」派の見解は，一言でいえば＜ポーランドの独立に反対する＞というものである。ここに彼らの国際主義的性格がよく示されているのであるが，それを内容的にみるとほぼ次の四つの論点に整理されるであろう。

まずプロレタリアートの利害の国際性を強調する，という論点である。たとえば，1880年の「ワルシャワ蜂起記念集会」[11] でヴァルィンスキは語っている。「われわれにとってポーランド国家の，あれこれの境界はどうでもよい。……わが祖国は全世界である。……彼らの〔プロレタリアートの〕利害はわれわれの利害である。……もしわれわれの蜂起の時がくれば，われわれはもはや＜ポーランド万歳！＞ではなく，……全世界のプロレタリアートにとっての共通のスローガン，＜社会革命万歳！＞を叫ぶであろう。」[12]

また，別の箇所では次のように主張している。被搾取者の利害は，搾取者の利害とは一致しないのであって，擬制的な民族的統一の名の下に，両者が集まる必要はない。むしろ，「都市労働者と働く農村住民の利害は等しく……ポーランド・プロレタリアートは，特権階級とは全く別に，独自な階級として斗うのであって，その経済的，政治的そして道徳的志向において全く異なるのである。」[13] そして「ポーランド労働者の運命は，他の諸国の労働者の状態に依存している。なぜなら，貧困によって彼らがその国を見捨て，他国へ移住するとすれば，その国の〔労働力市場での〕競争によって賃金を引下げる」[14] のだから。また，一社会の労働者階級の斗争は，他の社会において反響をひきおこし，また一つの勝利はすべての〔社会の〕労働者の運命を改善するであろうし，また敗北はその逆であろう。だから，「ポーランド・プロレタリアートは，搾取者に対する斗争において，被搾取階級として，すべての被搾取者とともに，その民族性にかかわらず連帯する」[15] のである。

次に社会主義と民族問題は質的に異なるという論点がある。「わが社会主義者にとって，民族問題は原則的に社会主義とかかわりない。民族問題は実践の上では，諸階級の統一と連帯に基づいているのであるから，われわれにとってはただ否定的な意味しかもちえない。つまり，それは労働者大衆の下での社会主義意識の発展にとっての障害であり，一般的にいって自由の利害をおかすものである。」[16] それに対し，社会主義は経済問題であって民族問題とはかかわりなく，実践上は階級斗争として現われるのである。

第三の論点として，社会発展の結果，民族問題の意義が変化したというものがある。「かつて，ポーランド問題は西ヨーロッパでよく知られた，そして現実的なものであり」[17] ポーランド民族独立運動を支持することは，西ヨーロッパの民主主義者の公理であった。しかし，「ポーランド社会の社会—経済的，そして歴史—文化的な発展によって，この問題は今日，その重大な意義を喪い，そしてただ都市住民の一定層内部での無意識な，民族的伝統になっている」[18] である。そして反動的貴族やブルジョアジーは，社会主義運動に反対する武器として，このポーランド問題を利用しているのである。

最後に，この民族独立を担う主体が現在のポーランド社会には存在していないという論点がある。まず貴族は，社会の進歩に対して「無能力，無気力，そして怠情」[19] であって，どんな社会の変革，改良にも反対である。彼らは，旧い習慣と特権を決して自発的には放棄しないし，それゆえ保守的な反動的要素をなしている。

「その歴史は浅いが，現在力を増しつつあるブルジョアジーは，東方〔ロシア〕の開かれた市場に満足している。」[20] 彼らはロシア政府が常に彼らの「神聖な権利」を守ってくれるものと期待し，それによって何らの困難もなく漸次的発展の道を歩むであろうと信じている。こうしてブルジョアジーもまた，あらゆる種類の変革に敵対的であって，彼らの関心は，「公的秩序と隊列」の保全なのである。

こうして特権階級として彼らは，「わが国の三領域で現状を是認しており，彼らは1863年以来，その経済的利害のゆえに，≪ポーランドの独立≫のための斗争を全く放棄している。≪民族的ポーランド≫問題は，彼らの奴隷政治的綱領においては，もはや抹殺されており，彼らがそれを持ちだす時は，ただ社会主義運動に反対する」[21] ためである。

次に農民層は，「ポーランド三領域で，平均して全住民の約70%を占めている」[22] のであるが，過去においては，ポーランドの民族的独立のための蜂起に対して，ごくまれな例外を除けば，常に敵対的であった。そして現在においても，彼らの「奴隷身分の従属からの解放が，ポーランドの特権階級によってではなく，征服者の政府によってなされた」[23] という事実の故に，民族意識や民族運動に対して敵対的である。彼らは民族的利害ではなく，経済的利害によって動かされるのである。

むろん労働者階級については，ポーランドにおける唯一の革命的要素であるが，彼らは民族運動ではなく，階級斗争を進めるのであることは先に見たとおりである。こうしてポーランドにおいては，独立運動を積極的に担う階級的主体は存在していない，というのが「プロレタリアート」派の見解であった。

以上のように，プロレタリアートの利害の国際性，社会主義と民族問題との

相違，民族問題の意義の歴史的変化，そして階級的主体の不在をあげて主張する「プロレタリアート」派の民族問題についての見解は，彼らの国際主義思想の核をなしており，それはのちにローザによって高く評価されたのであった。

(3) ポーランド革命論

前述したように，「プロレタリアート」派のポーランド革命論は，ロシアの革命運動とのつながりにおいて形成されたものであった。彼らは一方で戦略として，ロシアにおける政治的自由の獲得＝ツァーリズムの打倒の緊急性を，「人民の意志」派の実践から学んだ。そして他方で，社会革命の問題として，経済，政治，道徳の三分野での日常的斗争を進めるという方針を持っていた。彼らは当初，この双方の斗いを結合しつつ，同時的に展開しようと試みたのであるが，のちにはもっぱらテロル活動中心の政治斗争に傾いたという経過については前節でみたとおりである[24]。こうした変遷を一応度外視すれば，彼らの考えていた革命のコースは簡単には次のように図式化されるであろう。一方において，経済斗争に重点をおいた三分野（経済，政治，道徳）での宣伝と扇動・労働者の階級意識の成長・「プロレタリアート」党の強化→時がくれば大衆運動の展開。他方において，「人民の意志」派を中心とする全ロシア革命諸力の結集・「プロレタリアート」党中央委員会の参加→「人民の意志」派の指揮によるテロル活動を中心とする対権力斗争の展開。こうしてツァーリズムの打倒・臨時政府の成立→ポーランド領域の分離・「プロレタリアート」党中央委員会の独裁→急速な社会主義化。これをもう少し詳しくみてみよう。まず，彼らは，「労働者階級の経済的，政治—社会的，そして道徳的な抑圧からの解放は，労働者自身の事業でなければならない」[25]という原則に立っている。そしてその実現のためには，ポーランドで唯一の革命的要素をなしている労働者階級を組織化しなければならないが，それを「プロレタリアート」党が引受けるのである。党はそのために三分野での斗争を進めるのであるが，経済的条件が社会的諸関係の土台をなしており，また経済的関係において最もよく，搾取される階級としての労働者階級の利害の特殊性があるのだから，この経済的条件をめぐる斗争に最も多く注目するのである[26]。そしてこれらの斗いは，現在の

政治的条件を考慮して当面秘密活動を強いられるが，時がくれば大衆的に展開するものとされている。こうした質の斗争は，「人民の意志」派の政治斗争一辺倒の傾向と比べると一つのちがいを示している。

次に，「ロシアにおける政治的自由獲得の緊急性」の問題については，「人民の意志」派が，「現時点における緊急の課題はツァーリズム（専制主義）を打ち倒して，民主主義的な政治制度を獲得することであり，ツァーリズムの打倒なしには，いかなる事業もありえないと考える」[27]のに対して，「プロレタリアート」派は，二つの理由をあげてその必要性を主張している。一つは，「ロシアにおける政治的自由の欠除が，社会主義の活動を極度に難かしくしており，最もエネルギィッシュな活動を，無意味な実践的結末へと導く」[28]からである。二つめは，それがポーランドの民族問題とのかかわりで特別な意味を持っているからである。つまり，社会主義運動は階級斗争なのであって，労働者の民族意識ではなく階級意識に依るのである。そのためには，階級意識の成長を促進するものとして，「ロシアにおける政治的自由」が要求されるし，またこの斗いを進める際に，民族意識を前面に出すことは有害であろう，というものであった[29]。結局，二つとも社会主義運動の利害にとって「ロシアにおける政治的自由」が必要であるという理由に還元されるであろう。これは「人民の意志」派と比べると，少しばかり含みをもった把握といえよう。

さて，このツァーリズム打倒の戦略を実現する方法について，「プロレタリアート」派は「人民の意志」執行委員会の下への全ロシア革命諸力の結集を提起しているのであるが，その論拠は次のようなものであった。①ポーランド・プロレタリアートは，全ロシア帝国の革命諸力との結合においてのみ，ツァーリズムを打倒できる。②その場合，「人民の意志」の下で，これらの諸力が最もよく組織化されうる。③テロル活動が成功するには，全ロシア領域で統一的に指揮される必要がある[30]。以上のような理由をあげて，「プロレタリアート」派は「人民の意志」派と連帯することを提案し，後者もその意義を認めて協定を結んだことは前に見た。そしてその場合，「経済的テロル，及びそれと不可分に結びついた種々の形態における政治的テロル」[31]が重要な意義をもってく

る。それを使って現在の国家機構を解体する斗いを進めるが，それは「社会革命の時点をはやめるのみならず，政府に一定の譲歩を強い，社会革命家士官の組織化を容易にする」のである。こうして「政府への無制限な勝利は，ただもしそれが同時にすべての重要な中心点で，政府暴力を麻痺させる時に得られるであろう。」[32)]

そして，「人民の意志」執行委員会の合図で斗争の発端が開かれ，それが拡がってツァーリズムが打倒されたとすると，執行委員会を中心とする臨時政府ができあがる。そうすると中央委員会はそれから分離し，ポーランド領域における指導を担当する。そして社会主義を実現すべく，地方的諸関係に応じて次のような政策をとる。経済関係では土地と労働用具の私的所有から全労働者の共同所有，社会主義的国家所有への移転。協同組合の組織化，及び賃労働の協同組合労働への転化，等，政治関係では，できるだけ大きな自由の保障，たとえば，言語，集会，結社などの自由。道徳関係では，迷信，無知などの克服のための無料義務教育の保障などであった。このように民主主義的なものと社会主義的なものからなっているが[33)]，それには「人民の意志」派の綱領における**ような「共同体的・フェデラリズム的色彩」**[34)] はみられない。

以上の検討から「プロレタリアート」派のポーランド革命論は，ロシア＝ポーランド同時・連続革命論とみることができるであろう。その場合，「人民の意志」派と異なって，「プロレタリアート」党はその名のとおり，労働者階級の党であることをめざしたものであり，フレーリヒがいうように「社会的現実や解放斗争の前提にたいする認識においては，「プロレタリアート」党は，ちょうどポーランドの社会発展がロシアのそれに先んじていたように，「人民の意志」派の認識よりもはるかにすぐれていた。」[35)] けれども実践活動において「人民の意志」派に一歩遅れをとっていたのであり，彼らとの同盟は「プロレタリアート」党の崩壊を早めたのみであった。

註

1）この節で利用した資料は，ほとんどが次のものに収録されている。G. W. Strobel (hrsg.), Quellen zur Geschichte des Kommunismus in Polen

1878～1918. Programme und Statuten. Verlag Wissenschaft und Politik. Köln. 1968. また一部は次のものを参照した。Alina Molska, Pierwsze pokolenie marksistów polskich. Tom 1～2. 1878～1886. Ksiażka i Wiedza. 1962.

2) 3) Programm des≫Arbeitskomitees≪. in: G. W. Strobel (hrsg.), Quellen……. S. 163.

4) Aufruf der≫Równość≪und≫Przedświt≪:≫An die Genossen russischen Sozialisten≪. in: G. W. Strobel (hrsg.), Quellen……. S. 159.

5) Allgemeine Richtlinien für das Programm und die Tätigkeit des Zentralkomitees der Sozialrevolutionären Partei ≫Proletariat≪. in: G. W. Strobel (hrsg.), Quellen……. S. 171.

6) 田中真晴，前掲書，57頁。

7) 8) 9) Programm des ≫Arbeitskomitees:≪, in: G. W. Strobel(hrsg.), Quellen……. S. 162.

10) マルクスの思想とはいっても，彼らが自らのものとしていたのは，たとえば『共産党宣言』にみられるような資本主義観の域を出ない。また，プルードンの思想に関しては，坂本慶一『マルクス主義とユートピア』 (1970) 及び河野健二篇『プルードン研究』 (1974) を参照した。

11) マルクスとエンゲルスはこの集会に対して挨拶状を送り，次のように語っている。「ポーランド分割は，ヨーロッパの全政府にたいするツァーリのヘゲモニーの仮面にすぎなかった神聖同盟を強化した。このようにして＜ポーランド万歳！＞のさけびは，そのまま，神聖同盟をたおせ，ロシア，プロシャ，オーストリアの軍事的専制政治をたおせ，現代社会にたいする蒙古的支配をたおせ！ということを意味した。」「ポーランド人は，その祖国のそとで，プロレタリアートを解放する斗争に大きな役割を演じた，——彼らはその国際的前衛斗士であった。この斗争がポーランド人民の内部でも発展しているこんにち，その斗争を革命的宣伝，革命的出版物によって支持せよ。その斗争をロシアの兄弟の努力と結合せよ。それは＜ポーランド万歳！＞というふるいさけびをくりかえすあたらしい機会となるであろう。」(『マルクス＝エンゲルス選集』第13巻上，95～6頁) このように，彼らはポーランドの独立を反ツァーリズムの立場から支持している。

またエンゲルスはカウツキー宛の手紙の中で次のように書いている。「ポーランドは大陸のまんなかに横たわっていて，まさにその分割の維持こそは，神聖同盟を絶えず，繰り返し結合させる紐帯なので」あること。また「国民的な独立が欠けているかぎり，ひとつの大きな民族にとっては，なんらかの内部的

な問題をただ真剣に論議することすら，歴史的に不可能」であること。それゆえ「プロレタリアートの国際的な運動というものは，一般的にただ独立な諸国民のあいだでのみ可能なのです。……だから，ポーランドが分割されていて抑圧されているかぎり，自国内の強力な社会主義政党も発展することはできないし，また亡命者としての別のポーランド人たちとドイツなどにおける他のプロレタリア諸政党との現実の国際的な交際も発展することはできないのです。」「私の見解では，ヨーロッパにおける二国民には国際的であるよりもまえに国民的であるという権利があるばかりではなくて，そうなる義務があるのです。」（エンゲルスからカウツキーへ，1882年2月7日）『マルクス・エンゲルス全集』35. 224～229頁）このように単に反ツァーリの立場のみならず，諸民族の自立権をあげてポーランド独立を支持している。

ロシア論とは異なって，ポーランドの独立問題に関してはその論拠の変化はあったとしても，マルクス及びエンゲルスは生涯独立支持派であった。これらの問題については別の機会にふれるつもりであるが，マルクス，エンゲルスのポーランド論については，阪東宏「マルクス，エンゲルスとポーランド問題」（『歴史評論』237号，1970）を参照せよ。

12) U. Haustein. a. a. O., S. 27. A. Molska, Pierwsze Pokolenie…, Tom 1. S. 423.

13) 14) 15) Programm des ≫Arbeitskomitees≪. in: G. W. Strobel(hrsg.), Quellen. ……S. 164.

16) 17) 18) Aufruf der ≫Równość≪ und des ≫Przedświt≪. in: G. W. Strobel (hrsg.), Quellen……. S. 159.

19) 20) Allgemeine Richtlinien für das Programm und die Tätigkeit des Zentralkomitees der Sozialrevolutionären Partei ≫Proletariat≫. in: G. W. Strobel (hrsg), Quellen……. S. 171.

21) 22) 23) Aufruf der ≫Równość≪ und des ≫Przedświt≪ :in: G. W. Strobel (hrsg.), Quellen……. S. 159.

24) ネットルは，ヴァルィンスキの思想を経済主義的なものであったと書いている。「当時のヨーロッパには，アナーキズムの政治主義に反発する雰囲気があった。ヴァリンスキたちも政治よりもむしろ経済を重視するようになり，この考え方をポーランドにもちこんでいる。」「大衆基盤をもった革命運動を組織するためには，労働者になじみぶかい日常的な問題をとりあげてかれらを組織していく必要があった。民族感情に訴えることは問題にならなかった。」J. P. ネットル，諫山他訳『ローザ・ルクセンブルク，上』(1974) 60～1頁。J. P. Nettle, Rosa Luxemburg. Vol. 1. pp. 45～46.

25) Programm des≫ Arbeitskomitees≪, in: G. W. Strobel (hrsg), Quel-

len……. S. 165.

26) 彼らが挙げた手段は，経済斗争では搾取形態に対する労働者の扇動，ストライキ。秘密労働者同盟の創立，経済的テロルなど。政治斗争では，行政活動への抵抗，租税スト，スパイや裏切り者への報復など。道徳的関係では，迷信の除去，科学的真実を知らせる文書の出版など，であった。参照. Programm des ≫Arbeitskomitees≪, in: G. W. Strobel (hrsg.), Quellen……. S. 166.

27) 田中真晴，前掲書，52頁。

28) 29) Aufruf der ≫Równość≪ und des ≫Przedświt≪, in: G. W. Strobel (hrsg.), Quellen……. S. 159.

30) 31) 32) Allgemeine Richtlinien für das Programm und die Tätigkeit des Zentralkomitees der Sozialrevolutionären Partei ≫Proletariat≪. in. G. W. Strobel (hrsg.), Quellen……. SS. 172～173.

33) Programm des ≫Arbeitskomitees≪, in: G. W. Strobel (hrsg.) Quellen……. 164～165.

34) 田中真晴，前掲書，54頁を参照。

35) パウル・フレーリヒ，伊藤成彦訳『ローザ・ルクセンブルク』(1973) 39頁。Paul Frölich, Rosa Luxemburg. Gedanke und Tat. Europäische Verlagsanstalt. 1967. S. 33.

4. むすびにかえて

前節において，「プロレタリアート」派のポーランド論を，三つの問題に分けて，整理したのであるが，ここでそれらと若きローザのポーランド論とのつながりについて，若干の考察をしてみたい。ただここでは，ローザのポーランド論を全面的に紹介し，検討することはできない。「プロレタリアート」派のそれとのつながりにおいて，必要と思われるものの指摘にとどめねばならない。こうした限定をふまえてローザの所論の要点をまとめてみよう。

(1) ポーランド社会の現状認識について，「プロレタリアート」派の，ポーランド社会はヨーロッパ社会発展の例外ではなく，1863年以来，ロシア市場との結びつきにおいて，確固たる資本主義的発展をとげている，という見解を，ローザは基本的に是認し，継承していると一応は言えるであろう。彼女のポーランド資本主義論は，『ポーランドの産業的発展』[1] において包括的に展開され

ているのであるが，その基本的論点は次のようなものであろう。まず，ポーランド資本主義の歴史と現状について，次のように捉えている。ポーランド資本主義は，マニュファクチュア期(1820～50年)，移行期(50～70年)，を経て，今や大工業の時代を迎えている。かつてポーランドは＜ヨーロッパの穀倉＞であったが，「工業は現今，国土の物質生活の他のすべての分枝がそこから樹液を吸いとっているところの基幹となった。あるいはより正確にいえば，それは物質生活の全領域——農業，手工業，商業，交通手段——を変革し自己に従属させるところの原動力である。かつてその社会関係においてあれほど独特の国であったポーランドは，こんにち典型的な資本主義国となった。」[2] のである。

またその発展の仕方については，「ますます，きわめてへだたった地点を物質的に結びつけ，相互に経済的に依存せしめ，ついには全世界を唯一つの強固に組立てられた生産機構に転化させるべく努力することこそが，資本制生産様式の内在的法則なのである。……交換と分業がロシアとポーランドを無数の糸で結びつけ，多様な経済的利害が錯綜しているので，こんにちではポーランドとロシアの経済はますます同一の複雑な機構を形づくっているのである」[3] としている。

こうして，「プロレタリアート」派の場合，単なる事実の指摘にとどまっていた資本主義認識を，ローザの場合には，マルクス主義的な方法に拠って分析し，あとづけ，そしてロシアとポーランドの経済的一体化を明らかにしたのである。ただし，「プロレタリアート」派のそれと同じく，ローザもまた，ポーランドにおける資本主義発展の事実に多く眼をむけ，そして彼女特有の資本主義観のために，その発展と社会の全構造との関連性の認識において，ひとつの弱点を持つことになった[4]。それが革命主体としてのブルジョアジーや農民層についての，彼女の判断を規定しているのであるが，ここではこれ以上立ちいらない。

(2) 次に民族問題について，ポーランドの民族独立に反対するという，「プロレタリアート」派の立場を，ローザは次のように評価している。「ポーランドの労働者階級に対する「プロレタリアート」の最も永続的な功績は，民族主

義に対する明確な態度であった。」[5] ポーランド社会主義者は，外国の支配に対していかなる関係に立つか，そしてポーランド社会の民族的伝統といかに対決するか，という問題から出発したが，「プロレタリアート」派はこれらの問題に対して，原則的に正しい立場にたったのである。「ポーランド問題はまだ理論的には解決されないが，ポーランド問題に対する社会主義の実践的態度は，きわめてはっきりと定式化されたのである。」[6]

このようにローザは，「プロレタリアート」派の国際主義的立場を継承しているのであるが，ここでは彼女自身の所論の特徴を，一点だけにしぼって指摘しておきたい。それは，資本主義的発展の事実及び傾向に従って，民族問題を判断するという態度である。それは，たとえば次のような文章にみられるものである。「ドイツにおいて分裂した諸邦の間に経済的吸引力，いわば資本主義の求心的傾向が作用したとすれば，ポーランドにおける経済的発展は，まったく逆の方向，より正確には三つの異なった方向——おのおのの地帯を当該併合国へと融合する方向——へと動いているのである。この併合過程が最も著しくすすんでいるのはロシア領ポーランドであるが，ポーランドの他の二地帯も，緩慢にではあれ，同じ過程に屈している。それゆえ，ポーランド再興は，ポーランドの社会的発展の結果であるどころか，直接それに対立するものである。」[7] このように，ポーランドの再興は，ブルジョアジーにとってはもちろん，「いまでは，ポーランドの再興に利益をもち，同時にこの利益を貫徹するだけの力を持つ社会階級は，もはやポーランドには存在しない」[8] ことになる。

そして彼女は次のように断定している。「プロレタリアート」派は，民族問題を，社会革命によってすべてが解放されるのだから，民族斗争などは余分なものと考えていたが，われわれは，ポーランドそのものの社会関係の中に，その解決を見た。「ポーランド問題はポーランドの資本主義的発展によってすでに解決されており，しかも否定的意味において解決されているということを発見した。なぜならポーランドは資本主義的生産諸関係と交換諸関係によってロシアにしっかりと結びつけられており，ポーランドの支配階級は，ロシアへの従属こそが彼らの生存条件なので，ポーランドにおける外国支配の強固な支持

者になっているからである。それゆえ，プロレタリアートの力によって一つの階級国家としてポーランドを再興しようという努力は，余分なものでなくて，実現不可能なもの，空想的なものであることがわかる」[9] と。以上のようにローザは，「プロレタリアート」派の立場を継承しつつも，内容的にはこれを，彼女の資本主義分析に拠って批判し，新たな論点を提示しているのである。他に階級主体の分析などについて興味ある論点が多くあるが，ここでは割愛せざるをえない[10]。

(3) ポーランド革命論についてであるが，ローザは，「ポーランドにおける社会愛国主義」の中で次のように書いている。「ポーランド・プロレタリアートの積極的任務は，あらゆる他の国々の社会民主党の任務と全く同じものである。すなわち，現存の国家制度の民主化である。ポーランドとロシアは一つの資本主義的機構になったのであるから，ポーランド・プロレタリアートとロシア・プロレタリアートは一つの労働者階級になり，当面の共通の課題は——ツァーリズムの打倒——である。」[11] ここにみられるように，「プロレタリアート」派と同じく，ローザもまた，当面の課題をロシアとポーランドのプロレタリアートの革命的連帯によるツァーリズムの打倒と考えている。

両者の違いは，斗争の方法としてのテロリズムと日常斗争を中心とする大衆運動動の重視の違いにあるとローザは主張している。彼女は，「プロレタリアート」派をブランキズムとして批判し，自らの立場を社会民主主義としている。すなわち，「プロレタリアート」は，政治綱領を持たない西ヨーロッパの社会民主党であると同時に，農民共同体の理論をもたないロシアの「人民の意志」派である。彼らは，マルクス主義的な階級斗争理論に接木されたブランキズム的奇襲理論を持っている。そして彼らは，日常斗争の指針となる政治的，社会政策的綱領をもたぬので，労働者大衆を階級斗争にかりだすことができないのである。

だが「プロレタリアート」派とローザの違いはこれにとどまらない。最も基本的な違いは，むしろツァーリズム打倒の根拠を，社会主義の抽象的，一般的理念として主張する（「プロレタリアート」派）のではなく，ポーランドに

おける資本主義発展の客観的過程の中に求めた（ローザ）ことにあった。ローザは語っている。「ポーランドとロシアの資本主義的な融合過程がいま一つの重要な弁証法的側面をもっている……。すなわち，この過程は，おのずと，ロシアにおける資本主義の発展の利害が絶対主義的政治形態と矛盾し，ツァーリ支配がその固有の仕事に失敗するような瞬間を生み出す。……ポーランドとロシアの資本主義的融合は，最終産物として……まずさいしょにロシアのツァーリ支配の・ついでポーランド＝ロシア資本支配の・きたるべき破産にさいする法律顧問としての，ポーランドとロシアのプロレタリアートの連帯を生み出すのである。」[12] このようにローザは，資本主義的生産諸力の発展が，やがてツァーリズムと衝突し（ブルジョア民主主義革命），ついで資本主義自体の崩壊（社会主義革命）をもたらすであろうということを，ポーランド資本主義の具体的分析をとおして明らかにしようとしたのである。

以上，ごく大ざっぱに，「プロレタリアート」派とローザのポーランド論の対比を試みたのであるが，両者の間には，一方では，ポーランドにおける資本主義発展の認識，民族問題，ロシア・ポーランドのプロレタリアートの革命的連帯によるツァーリズムの打倒戦略などにおいて，共通の認識がみられる。しかし他方，ローザは，マルクス主義的な方法による，ポーランド資本主義の分析を基軸にして，「プロレタリアート」派のポーランド論を批判し，内容的にも大きな前進を示している。しかし，これを別の角度からみれば，ローザのポーランド論は，「プロレタリアート」派の形成した，国際主義的社会主義の土俵の中でつくられたものといえるであろう。そういう意味で，「プロレタリアート」派のポーランド論が，ローザによるポーランドへのマルクス主義導入の際に，大きな影響を及ぼしたといえるのではないかと思う。これらの諸論点についてのローザ自身の論稿に関する立ち入った検討は，次の機会にゆずらねばならないが，とりあえず彼女の思想的特徴とその背景の一端が明らかになったであろう。

註

1）R. Luxemburg, Die industrielle Entwickelung Polens. (1898). in: R.

Luxemburg. G. W. Bd 1. Erster Halb. SS. 113～216. 肥前栄一訳『ポーランドの産業的発展』(1970)。

2) R. Luxemburg, a. a. O., SS. 151～152. 邦訳書, 68～69頁。

3) R. Luxemburg, a. a. O., SS. 209～210. 邦訳書, 169～170頁。

4) こうした問題に焦点を合わせて書かれたのが, 肥前栄一「ローザ・ルクセンブルクの資本主義観の2, 3の特質について」(肥前『ドイツ経済政策史序説』1973に所収) である。

5) R. Luxemburg, Der Sozialismus in Polen. in: R. Luxemburg G. W. Bd1. Erster Halb. S. 85. 「ポーランドにおける社会主義」丸山敬一訳『マルクス主義と民族問題』(1974) に所収。135頁。

6) R. Luxemburg, a. a. O., S. 85. 邦訳書, 136頁。

7) R. Luxemburg, Neue Strömungen in der polnischen sozialistischen Bewegung in Deutschland und Österreich. in: R. Luxemburg G. W.. Bd1. Erster Halb. S. 21. 「ドイツおよびオーストリアにおけるポーランド社会主義運動の新しい潮流」丸山訳前掲書, 84頁。

8) R. Luxemburg, Der Sozialpatriotismus in Polen. in: R. L. G. W. Bd1. Erster Halb. S. 46. 「ポーランドにおける社会愛国主義」前掲丸山訳, 120頁。

9) R. Luxemburg, Der Sozialismus in Polen. in: a. a. O., S. 89. 邦訳, 前掲書, 141頁。

10) ローザの民族自決権概念についての研究に, 次のものがある。伊東孝之「東欧の民族問題とマルクス主義の民族自決権概念——ローザ・ルクセンブルク——」(『スラヴ研究』18号 (1973))。伊東氏は, ローザが, nation の西欧的な意味と東欧的な意味の峻別の上に立って, 民族問題を考えていた, と主張されている。

また, トルコの民族問題については, 丸山敬一「ローザ・ルクセンブルクと民族問題——トルコ問題を中心として——」(『法学雑誌』第19巻第2号) がある。

11) R. Luxemburg, Der Sozialpatriotismus in Polen. in: a. a. O., SS. 50～51. 邦訳前掲書, 126頁。

12) R. Luxemburg, Die industrielle Entwicklung Polens. in: a. a. O., SS. 210～211. 肥前訳, 前掲書, 171～172頁。またローザのポーランド革命論については, 竹本信弘「ロール・ルクセンブルクのポーランド革命論」(『経済論叢』第98巻第2号) を参照。

〔1975. 1〕